

はたして建築は悪者なのか？

東北大学
大学院工学研究系 教授
五十嵐太郎
Taro Igarashi



ワイドショーのネタとして消費される建築

最近はまだテレビを見なくなっているのだが、それでもたまにつけると憂鬱になる。連日のように、ワイドショーなどの番組で、豊洲市場の「問題」をおもしろおかしくネタにしているからだ。コメントターらが、不確かな情報や不正確な知識にもとづく憶測とミスリードでさんざん不安をあり、挙げ句の果てには豊洲エリアが風評被害にまみれてしまったという。自らが風評をつくるというマッチポンプぶりには呆れるが、ともあれ行政の手続きや広報、そ

して建築の「問題」がごちゃまぜになって、悪いイメージだけが拡散されている。テレビというメディア自体、ネットの時代を迎え、以前に比べて、広告収入が減り、制作現場は苦しくなっていると思われるが、貧すれば鈍するともいうべきか、安上がりで視聴率を稼げるコンテンツとして建築バッシングが使われている。政治家が変革の象徴として建築プロジェクトのちやぶ台ひっくり返しをすること自体は以前からあったが、今はそれにメディアが飛びつき、エンターテインメントと化すようになった。

言うまでもなく、これは昨年のザハ・ハディドによる新国立競技場案の白紙撤回につながる

あまりに一方的な言いように対して、設計者サイドからの反論もあつてしかるべきだと思つたが（ネット上では、直接の当事者ではない建築の関係者によるさまざまな反論が出ているが）、守秘義務のせいなのか、残念ながら、ほぼ沈黙していた。結局、ザハ・ハディド側からの合理的な設計意図を伝えるプレゼンテーション動画が発表されたのも、白紙撤回の後だった。

もしかすると、さまざまな方面から反論はあつたのかもしれない。なぜそう思うのかと言うと、筆者も昨年複数のメディアからコメントを求められていたのだが、事業主のプログラムを検証せずに、建築家だけを一方的に批判するのはおかしいと述べても、先方の意に沿わない回答だからなのか、使われなかった。つまり、マスメディアがある対象を叩くモードになっている

ときは、特定の方向の情報のみが増幅するシステムになっており、それ以外の意見は無視される（例えば、ザハ・ハディドや安藤忠雄は他に何か失敗していないか、教えて欲しいという質問も筆者に寄せられた）。ちなみに、新国立競技場に対する筆者のコメントが再び新聞に載るようになったのは、白紙撤回の後である。毎日新聞と共同通信社に建築評を定期的に寄稿するようになって一五年近く、少しずつ建築のおも

しろさを広く伝えようと努力していたつもりだったが、新国立競技場の一件は積み上げてきたものが簡単に崩れるような徒労感を味わつた。

建築主を重視するBCS賞の意義

実はまさに新国立競技場がニュースを賑わせているときに、初めてBCS賞の選考に関わつた。一般的に多くの建築賞はデザインが評価の対象になるが、BCS賞は建築主、設計者、施工者の三位一体が重視されるユニークな顕彰システムである。当然、新国立競技場も豊洲市場も設計者が勝手にデザインしているわけではない。日本スポーツ振興センター（JSC）や東京都が基本的なプログラムや事業計画を立てているはずであり、それも含めて、設計者や施工者と良好な関係結び、すぐれた建築が誕生する。だが、複雑な背景を考へることなく、メディアは叩きやすい顔をもつザハ・ハディドを攻撃して、視聴者はそれで満足してスッキリする。近年の騒動を通じて、事業主がちゃんとしていないと良い建築が実現しないと改めて思うに至り、そうした意味で現代におけるBCS賞の重要性を確信した。しかし、業界内ではとても有名なこの賞は、必ずしも一般的に知名度があるとは言い難い。正しい建築の理解のためにも、

マスメディアの過熱報道から続いていることだ。かつて前衛的な建築家としてデビューした彼女が、まさかお茶の間のテレビでその顔写真が見られるような事態が起き、完全に悪役のキャラとして認知されていた。おぼちゃんたちも名前を覚えるようになったことに心底驚かされたが、やはりテレビの影響力は大きい。トンデモ・デザインをやったから、コストが途方もなく跳ね上がり、そもそも建設は不可能だと、さんざんこき下ろされていた。また世界各地で巨大プロジェクトを数多く抱える建築家に対し、いまだに三〇年前の呼称「アンビルドの女王」呼ばわりも失礼だった。豊洲市場も新国立競技場も、

今後もっと広く知られていくことが必要だろう。

公共建築の未来のために

むろん、専門家以外も建築に興味をもつことは悪いことではない。パリのエッフェル塔、ポンピドゥーセンター、ルーヴル美術館のガラスのピラミッドなども、是非をめぐって話題になり、やがて都市のランドマークとなった。あるいは、開発プロジェクトに叛旗をひるがえした市民運動を経て、独自の都市思想に結実させたジェイン・ジェイコブスのように、批判にも哲学があれば、オルタナティブなモデルを提出しうる。だが、現在の日本で起きていることは、ガセネタでも何でもよいから建築プロジェクトを炎上させ、時間をかけて構築してきたものを引きずりおろす、一時のカタルシスに熱狂する文化革命的な祭りであり、終わつた後には何も残らない。正直、誰が得するのだろうかとか疑問に思う。放火を繰り返していけば、まともに公共建築もできなくなる。近年、ワークショップを伴うコミュニティ・デザインが注目されているのは、ハコモノをソフトランディングさせる手法になりうるからだろう。一方で、メディアの安易なバッシングへの対抗言説のつくり方も検討すべきではないか。